

コナラ属が多く産出した試料は、沢状地形の自然堆積層中で、1694年降灰のKo-c2火山灰層より上位で採取したものである（H20- 試料2、H21-No.1・No.2、H22-No.1・No.2、H23-No.2、H24- 試料①・②）。これらの試料は館城築城直前の百数十年間の環境を示していると考えられる。カバノキ属が多く産出した試料は堀の底面（H19-No.2、H24- 試料④）や沢状地形の上層部（H23-No.1）で採取されたものである。カバノキ属は森林が切り開かれた土地に最初に侵入を開始する先駆樹種であり、カバノキ属の多産は館城築城に伴い周辺の森林が伐採され、その後、二次林化した結果であるとの推測がなされている。

V章第2節において森は近世から近代にかけての館城周辺の環境変遷を以下のように推測する。

- ①丘陵地周辺にはコナラ属やブナ属が分布し、低地にはハンノキ属やミズバショウ属が生育できる湿地が存在した。
- ②明治元年（1868）の館城築城に伴い周辺の森林が切り開かれ、そこにカバノキ属が侵入し、純林を形成した。
- ③近代の時期を経るとカバノキ属の林は縮小し、再び冷温帶性落葉広葉樹林が優占した。

草本類ではソバ属が検出されていることが注目される。

これまでに検出されたソバ属は、H20- 試料2、H21-No.1,2、H24- 試料①,④の5試料である。いずれも沢状地形からの検出であり、館城築城期を含むと考えられる土層からの採取である。館城築城期前後には、館城周辺でソバ栽培が行われていた可能性が高い。

（2）『報功心血』が描く築城直前の自然景観

『報功心血』（函館市中央図書館所蔵）の著者は今井微、校閲は渋谷十郎と池田晃淵である。松前藩正義隊の一員であった今井が幕末の松前藩史を記録した史料である。原本は所在不明で、函館市中央図書館所蔵の写本のみが確認される。写本は、昭和2年の図書館公立化に際して私立時代の蔵書から引き継いだものである（函館市中央図書館田村昌弘氏の教示による）。執筆年は不明であるが、本文中にカッコ書きで「（前著北海史論）」とあり、「北海史論」は、明治26（1893）年刊行の『建勲正蹟北海史論』（今井1893）を指すとみられることから、本書は明治26年以後の執筆であろう。

『報功心血』の描く館城築城直前の風景を以下に引用する。

其城壘を為すへきの高原は一帯の茅茨にして、一刈以て平坦を見るの想ひあれとも、刈るに従ひ茅根に幾百の巨木僵倒し、其径概ね六七尺。

築城地は「一帯の茅茨」であり、茅を刈るとその根本には多くの巨木（直径6～7尺）が倒れていたとの記述である。「一帯の茅茨」が示す植生の詳細はわからないが、高木性の樹木がなく、草本類と灌木、低木が広がる景観であったと考えられる。『報功心血』が描く築城直前の館城周辺景観は花粉分析が示すようなコナラ属やブナ属の落葉広葉樹林の景観とは一致しない。

（3）北海道内における近世の畑跡

前項で述べたように、館城築城期前後にはソバ栽培がなされていた可能性が高い。

北海道内では16箇所で近世にさかのぼる畑跡が確認されている。これらの畑の中には、ヒトを宿主とする寄生虫卵が見つかっているものもあることから、人糞肥を使用した「常畑」が近世には存在したとされる（谷島2005）

北海道南部の森町では、北海道縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、上台2遺跡、森川3遺跡、

森川5遺跡、森川6遺跡森川3遺跡の4遺跡で畠跡が検出されている。4遺跡で検出された畠跡の面積の合計は2万m²を超える。1640年降灰のKo-d火山灰に覆われ16世紀後半から17世紀前半とされる近世の畠跡である（北海道埋蔵文化財センター2005, 2006, 2011、森町教育委員会2007）。

森川3遺跡の調査者の谷島（2006）は「秋田県北部と北上山地には、アラキと呼ばれる焼畠が行われ、これは新たに常畠を確保するための、いわば開拓型の焼畠で畠立てを行っている」とし、森川3遺跡検出の畠跡についても「本遺跡は畠の全面が「アラキ型」とは言えないが、少なくとも平成16年度調査範囲の南側500m²程が畠と考えうる凹凸の条が確認され、アラキ型と考えられる耕作法をしていた」と推測している。

森川6遺跡の調査者の土肥（2011）も、「小単位の畠が場所を移りつつ重なった状況とみられる。これは地力が落ちれば次々と新地へ移っていく状況を示すものかもしれない。」としつつ、Ko-d直下の植物遺体の分析や昆虫遺体の出現頻度の高さから、Ko-d降灰直後の環境を笹原と想定し、「耕作に際し森林を焼きはらい、やがて耕作放棄のち森林が回復する過程の笹原の段階であった」とし、焼畠農耕の可能性を示唆している。

（4）文献にみる近世北海道南部の畠作とソバ栽培

近世の厚沢部町やその周辺地域でのソバ栽培の実態についてははっきりとはわからないが、幕府巡見視渡久藏らが寛政10年（1798）に記録した『松前蝦夷行程記』では、「厚沢部村 雜木、薪、河鮭漁、雜穀、畠多く有」とされ、雜穀栽培がなされていたことがわかる。また、文化14年（1817）に江差に滞在した幕吏松田伝十郎の『北夷談』では「此の沢に安野呂村といふあり。此処より出る蕎麦別して上品」とあり、厚沢部川流域の安野呂村（現厚沢部町字滝野）で品質の高い蕎麦が栽培されているとされている。

天明5年（1785）に「蝦夷地見分隊」の「竿取」として蝦夷地を訪れた最上徳内が著した『蝦夷草紙』（吉田1965）では、大野村（現北斗市）の百姓儀兵衛からの聞き取り調査として、「荒起（あらぎ）」とよばれる焼畠農耕が行われていることを記録している。

大野村百姓儀兵衛が述べたところによると、「荒起」では、「初年より三年ばかりの間は宜しけれども、五年ほども経て後は、土地瘦せて穀せず。此時是を捨て、又外所に荒起を新開す」という。1年目から3年目までは収量があるが、5年ほどたつと土地が痩せてしまうという。そのため、その土地での耕作をやめて、また別の場所で「荒起」を新たに行うのだ、と述べている。

（5）考察

館城周辺での畠作の状況を示す史料は見つからないが、厚沢部川流域ではソバを含めた雜穀栽培が行われていたことが史料から確認できる。館城周辺でも、築城以前にソバ栽培が行われていた可能性は高い。また、開墾型「アラキ型」焼畠が近世の北海道南部で行われていた可能性が高いことが発掘調査から明らかとなっている。さらに「荒起」と称される焼畠が18世紀末の北海道南部で行われていたことが文献史料により確認された。

以上のことから館城周辺の自然環境の変遷をまとめると以下のようになる。

- (1) 丘陵地周辺にコナラ属やブナ属が分布し、低地には湿地が形成され、ハンノキ属やミズバショウ属が生育する。
- (2) 近世に館城周辺の低地でソバ栽培が行われ、これにともない、低地の樹木が伐採される。
- (3) 数年以内に耕地は放棄され、草原化する。
- (4) 館城築城に伴い、南側の丘陵部の樹木伐採が行われ、コナラ属が減少する。
- (5) 南側丘陵部の伐開跡地にカバノキ属が侵入し二次林の形成が進む。
- (6) 植生の遷移によりカバノキ属が減少し、再び、潜在植生である冷温帶性落葉広葉樹林が優占する。